心の障害児と共生

虐待体験から教育相談を志し、行動分析学を学んだ

子の行動 直して褒めて

奥田 健次さんに聞く

自立へ明確な将来像

アスペルガー症候群（アスペ）、発達障害、自閉症……。今、様々な診断名を付けられた、心の発達に障害を持つ子どもが増えている。学校などで理解されず、いじめの対象になったり、不登校を繰り返したりの生活を余儀なくされる。両親など大人も苦しい日々を送っている。そんな親子の行動を「行動分析学」という新しい療法で直そうという臨床心理士がいる。長野県御代田町に拠点を持つ、奥田健次さん（42）を訪ねた。

「私は5歳頃から、母親が再婚した継父から毎日、虐待を受けました。家にいることが嫌になり、小学生時代から家出を繰り返し、中学後半からは完全に不登校になりました。そんな時、教会でドイツ人宣教師に出会って、本当の父親のように温かいが厳しく諭してくれる指導で立ち直りました。その頃から自分の経験を生かして、子どもの教育相談を一生の仕事にしようと考えました」

「18歳から働きながら、大学夜間部で幼児教育学、心理学などを学んだあと、米国に留学。そこで自閉症の子どもたちに出会いました。米国では行動分析学によって、子どもたちの行動に短期間で変化が表れ、健常な子どもの行動になっていく。それを見て、日本でもこの療法で発達に障害のある子どもや家族を手助けしようと決意しました」

「行動分析学とは、心理学の一分野。行動することで直後に得られた結果を、行動の原因と考える学問と応用科学です。例えば、自閉症の子どもが泣き叫ぶと、母親が抱きしめて子どもをなだめようとします。しかし、子どもは抱きしめてもらえるという結果（利益）があるから泣き叫ぶ。そこで、母親は子どもが泣き叫んでも抱きしめずに背を向ける。しかし、静かに遊ぶことができたら、抱きしめてあげるように指導する。すると、子どもは泣き叫んでも抱きしめてもらえる利益がないことを理解し、静かに遊ぶようになります」

「一時的に子どもがより暴れたりすることもありますが、妥協せずに続けていくと子どもの行動は著しく改善する。もちろん処方箋は子どもによってケース・バイ・ケース。直後の結果を行動の原因と考えて、一人ひとりを診断、個別の行動改善計画を立てる。20年間、1カ月に約100人の子どもを診てきた過程で、自信ができました」

「発達障害者の支援ばかりでなく、行動分析学は動物の飼育や企業の組織運営などにも応用できます。親子、学校の先生などのほか、動物飼育者、企業幹部などにも学んでもらおうと、長野県の西軽井沢に2012年4月、研修・合宿施設『行動コーチングアカデミー』を開設しました。ここを拠点に国内外に出張カウンセリングに出かける一方、夏季には研修合宿を実施しています」

子どもは百人百様である ことを理解するのが基本

「障害のある子どもを支援するのに、現代ではアスペとか高機能自閉症とか医学的な診断名を気にする人もいますが、そんなことはどうでもよい。本人や周囲にとって大きな不利益をもたらす子どもの行動を変えていくことが重要です。しっかりした行動改善計画を立てて、子どもを治すのではなく行動を直すのです。子どもが親離れして自立するように手助けし、望ましい行動を増やす努力をする。それには、暴力や暴言は厳禁です」

「両親や幼稚園、学校の先生も、これをやってはいけない、あれをやってはいけないと望ましくない行動を禁じたり、できなければ罰を与えるというやり方は間違っています。行動分析学では『死人テスト』と呼んでいますが、死人のように何もしなければ優等生なのかということになります。そうではなく、生きている人間が望ましい行動をより多くできるようになるように指導する。積極的に子どもの望ましい行動を創っていくのです」

「子どもは様々な好みや問題点を抱えており、性格は百人百様だということを理解することが基本。そのうえで両親や先生がしかったり、たたいたりするのではなく、それぞれの子どもに応じた行動計画を立てる。望ましい行動ができたときには、大いに褒めて、子どものやる気に火をつける。どんな子どもに育てたいのか、目先の曖昧な希望ではなく、具体的行動が目に浮かぶような、明確な子どもの将来像を描くことが重要です」

日本の教育の現状、意欲を失っている学校の先生には落胆しているが、これからの若者に期待しているという。

「今の学校の先生は、教育委員会、保護者、マスコミなどからの批判を恐れて、子どもを守り、育てる意欲を失っている。無力化しているように見受けられます。発達に障害のある子どもの行動を直していく方法を、教育の場に就職しようとする若者に意欲的に学んでほしい。文部科学省が打ち出した、障害者と非障害者が共生できる社会を創造していくためにも、先生方の力量が問われています」

（生活情報部　木戸純生）

おくだ・けんじ　臨床心理士、行動分析学者。1972年兵庫県西宮市生まれ。倉敷市立短期大学卒、兵庫教育大大学院修了。桜花学園大学准教授などを経て、2012年から桜花学園大学大学院客員教授。同時に長野県御代田町に行動コーチングアカデミーを開設して代表に。著書に「拝啓、アスペルガー先生」「叱りゼロで『自分からやる子』に育てる本」など。

長野に幼稚園開設を計画

園児と高齢者の交流も

奥田健次さんは、行動コーチングアカデミーを開設した長野県御代田町の約1万6500平方㍍の敷地に、行動分析学を応用する幼稚園を開設する計画を進めている。佐久地方を中心に定員35人の3～5歳の幼児を集め、発達に障害のある子どもと健常な子どもが共生できる社会を築く教育を実践していくという。

幼稚園の建設予定地に立つ奥田さん

来年にも学校法人「西軽井沢学園」（仮称）を設立、園舎を建設して、2017年4月の開園を目指す。地元には元気な高齢者が多く住むことから、「農業体験や陶芸など園児と高齢者の交流事業も積極的に採り入れて、高齢者の生きがいにもつなげていきたい」としている。幼稚園には小さな教育相談室を併設、地域で心の悩みを抱える親子の相談にも活用する。

「障害者と非障害者が共に学ぶ共生社会を実現するために、これを率先して実践する教育を長野県から全国に発信していきたい」と話す。